

山崎郷土叢書

NO. 133
 令和元.8.25
 山崎郷土研究会
 兵庫県宍粟市山崎町
 大谷 司郎

明治以降の山崎の年表 (六)

大谷 司郎

昭和二十七年から四十年の頃

明治以降の山崎を中心とした出来事を年表にして六回目になります。今回は、昭和二十七年（一九五二）から昭和四十年（一九六五）までを取り上げます。時代が今に近づくに従い、引用文献の少なさや内容の片寄りなどから、そのころの実体験をお持ちの方も多い中で、汗顔の至りと思いつながら、不足部分のご教示いただくこととして、昭和の時代を続けます。

『宍粟』発行 昭和二十七年に宍粟郡勢要覧というべき『宍粟』を宍粟地方事務所が発行しました。その前年に日本と連合国が締結した第二次世界大戦の終結を意味する講和条約の発効が四月にあり、日本が国際社会に復帰したことと、宍粟地方事務所開庁十周年を記念して作成したと、同事務所長が発刊の言葉に記しています。当時の歴史、土地、人口、行財政、産業、文化など宍粟郡十九町村の実情がわかる数少ない資料となっています。

昭和の大合併 昭和二十八年（一九五三）十月に町村合併促進法が施行され、翌二十九年十月に、まず山崎町と菅野村が合併して山崎

目次

明治以降の山崎の年表 (六)	大谷 司郎	1
『山崎新聞』から見えること	大谷 司郎	4
空中写真と地図	清水 哲	6
山崎閣斎の「雪朝即事」について	松下 宣夫	12
福原謙七の地方官時代	高井 淳	13
ぶらりふるさと地名考シリーズ②「山崎」	竹内 克司	14
比地条里の研究 その3	片山 昭悟	17
会員・家族の文芸		20
研修旅行のお知らせ・事務局だより		21
郷土会報総目次 第一二四号〜一三一号		22
編集後記		24
平成三十一年・令和二年度役員名簿		25

町となります。翌三十年七月には宍粟郡南部一町（山崎町）六ヵ村（城下、戸原、河東、神野、蔦沢、土万）が大同合併して山崎町になります。明治二十二年（一八八九）から続いた町村の組織は大きく集約されていきます。昭和三十四年には町役場が鹿沢の地に移転し、平成の合併で宍粟市になるまで存続します。

教育施設の整備 校地が手狭であった山崎高等学校が現在の加生の地に移転（昭和二十九年）します。また、各小学校の増改築や、昭和二十二年の学制改革により俄にできた各中学校の校舎、運動場、体育館等の整備が着々と進められます。そして、幼稚園は大正十年に開園していた山崎幼稚園は別格として、他の校区の園舎新築が進められ、次々と開園し幼児教育がはじまります。

明治以降の山崎の年表(11)

西暦年	和歴	年	月	日	事 項	出 典 等
1952	昭和	27			『本村の実情に即した全村教育』が発行される。	神野村
1952	昭和	27	3	12	山崎旭座へ松竹大歌舞伎一行が来演、第13代目片岡仁左衛門襲名の披露として巡演される。	山崎新聞第1337号
1952	昭和	27	7	1	『宍粟』(宍粟郡勢要覧)が発行される。	兵庫県宍粟地方事務所編
1952	昭和	27	7	2	宍粟地方事務所開庁10周年記念式典が行われる。	山崎新聞第1353号
1952	昭和	27	7	28	宍粟郡製材事業協同組合設立総会が行われる。	山崎新聞第1357号
1952	昭和	27	6		文化団体の「新潮会」が発足する。	新潮50年(同会記念誌)
1954	昭和	29			山崎自動車教習所が誕生する。	山崎町史
1954	昭和	29	8	18	山崎、菅野両町村議会は満場一致で合併を可決する。	山崎町史
1954	昭和	29	9		山崎高等学校2学期から山崎町加生の新校舎へ移転する。	創立百周年記念誌(山崎高等学校)
1954	昭和	29	9		土万幼稚園が開園する。	土万幼稚園沿革史
1954	昭和	29	10	1	山崎町と菅野村が合併して山崎町になる。	山崎町史
1955	昭和	30	7	2	宍粟郡南部1町6か村町村議会はそれぞれ満場一致で合併を可決する。	山崎町史
1955	昭和	30	7	20	山崎町、城下村、戸原村、河東村、神野村、葛沢村、土万村が大回合併して山崎町になる。	山崎町史
1955	昭和	30	8		町長選挙で村上彰治氏初代山崎町長となる。	議会第200回のあゆみ
1955	昭和	30	9		町議会議員選挙で30人当選する。	議会第200回のあゆみ
1955	昭和	30	9		初議会で議長に立花関治氏、副議長に小寺新兵衛氏を選出する。	議会第200回のあゆみ
1955	昭和	30	10		国勢調査で山崎町の人口28,902人となる。	山崎町合併30周年記念号
1955	昭和	30	11	1	山崎町の「町章」を制定する。	山崎町史
1956	昭和	31	4	18	神野幼稚園が開園する。	神野幼稚園沿革史
1956	昭和	31	5		戦没者合同慰霊祭を始める。	山崎町合併30周年記念号
1956	昭和	31	6		山崎町民主化協議会が発足する。	山崎町合併30周年記念号
1956	昭和	31	9		第6回議会で議長に小寺新兵衛氏、副議長に立花関治氏を選出する。	議会第200回のあゆみ
1956	昭和	31	10		伊水・都多幼稚園の開園式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32	1		菅野中学校校舎増築落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32	3		河東幼稚園が開園する。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32	4		葛沢診療所が開設される。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32	4		城原中学校校舎落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32	7		菅野幼稚園が開園する。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32	8		宍粟郡伝染病院が完成する。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32	8		国道29号線、町内で工事始まる。	山崎町合併30周年記念号
1957	昭和	32	9		体育指導委員会が発足する。	山崎町合併30周年記念号
1957	昭和	32	10		城下幼稚園の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1957	昭和	32			三河村が佐用郡へ替わる	横井先生講義資料
1958	昭和	33	4		神河中学校屋内運動場落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1958	昭和	33	4		引原ダムの完成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1958	昭和	33	4		町営住宅が山崎町段で20戸完成する。	山崎町合併30周年記念号
1958	昭和	33	8	29	富田碎花作詞作曲の山崎町町歌が制定される。	議会第200回のあゆみ
1958	昭和	33	12		菅野中学校運動場の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1959	昭和	34	3		城下小学校校舎改築の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1959	昭和	34	4		山崎幼稚園園舎増築の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1959	昭和	34	4		土万小学校校舎の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1959	昭和	34	5		山崎町役場庁舎の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1959	昭和	34	6		町役場が本町から鹿沢の新庁舎へ移転する。	議会第200回のあゆみ
1959	昭和	34	9		第28回議会で議長に小田一二氏、副議長に中谷治市氏を選出する。	議会第200回のあゆみ
1960	昭和	35	1	1	山崎町庁舎竣工記念の「町勢要覧」が発行される。	竣工記念町勢要覧
1960	昭和	35	4		下村記念館の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1960	昭和	35	4		郡是製糸山崎工場が操業を休止する。	私達の自分史(郡是製糸)

明治以降の山崎の年表(12)

西暦年	和歴	年	月	日	事 項	出 典 等
1960	昭和	35	9	10	山崎町商工会の設立総会が行われる。	四十七年の歴史(山崎町商工会)
1960	昭和	35	10		国民年金制度始まる。受付を開始する。	議会第200回のあゆみ
1960	昭和	35	11		山崎闇斎木像が吉川英治氏より山崎町に寄贈される。	議会第200回のあゆみ
1960	昭和	35	12		都多小学校校舎改築の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1960	昭和	35	12	14	青木銅鐸が発見される。	しそうの文化財-指定文化財-
1960	昭和	35			この頃から農耕牛は減少し、耕耘機、トラクターが普及し始める。	山崎町史
1961	昭和	36	1		三土中学校校舎火災で焼失する。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36	3		山崎小学校校舎本館の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36			兵庫県立林業試験場に名称変更する。	山崎町史
1961	昭和	36	5		神河橋の完成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36	6		神野診療所が与位に開設される。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36	8		青年団による納涼盆踊り大会開催される。	青年団記録
1961	昭和	36	9		神野小学校講堂の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36	9		第40回議会で議長に大久保光雄氏、副議長に高井国男氏を選出する。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36	11		城原中学校校舎体育館の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36	11		蔦沢中学校特別教室棟の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1961	昭和	36	12		郡是製糸山崎工場が閉鎖となる。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	1		山崎闇斎の歌碑が完成する。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	1		(財)北山新太郎育英会が発足し奨学金が支給される(38年4月から適用)。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	3		宇原橋が完成する。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	4		菅野小学校増築校舎の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	5		三土中学校校舎の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	6		神河中学校理科教室棟が完成する。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	7		山崎中学校増築校舎が完成する。	議会第200回のあゆみ
1962	昭和	37	11		し尿処理場が山崎町船元に完成する。	議会第200回のあゆみ
1963	昭和	38	1		大雪が降り山林が大きな被害を受ける。	議会第200回のあゆみ
1963	昭和	38	1		第52回議会で議長に高井国男氏、副議長に大西八郎氏を選出する。	議会第200回のあゆみ
1963	昭和	38	6		東洋建材が創業される。	議会第200回のあゆみ
1963	昭和	38	8		町長・町議選挙で井口光司氏が当選し、議員22名を選出する。	議会第200回のあゆみ
1963	昭和	38	9		第56回議会で議長に大西八郎氏、副議長に太田耕一氏を選出する。	議会第200回のあゆみ
1963	昭和	38	9		平野橋(山崎町上ノ)が完成する。	議会第200回のあゆみ
1963	昭和	38			フタギ(後にジャスコ)山崎店が鹿沢で操業を開始する。	山崎町史
1964	昭和	39			山崎町商工会館が山崎保健所を改修して建設される。	四十七年の歴史(山崎町商工会)
1964	昭和	39			山崎美術協会が結成される。	山崎町史
1964	昭和	39	7		播磨山崎郵便局舎が落成する。	議会第200回のあゆみ
1964	昭和	39	8		台風14号来襲で橋6つ流失など大被害を受ける。	議会第200回のあゆみ
1964	昭和	39	9		第71回議会で議長に武藤林之助氏、副議長に森谷軍治氏を選出する。	議会第200回のあゆみ
1964	昭和	39	9		台風20号来襲で河川など242か所被害を受ける。	議会第200回のあゆみ
1964	昭和	39	11		清姫橋が完成する。	議会第200回のあゆみ
1964	昭和	39	12		山崎営林署庁舎の落成式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1965	昭和	40	3		大谷橋・宮前橋(山崎町中野)が完成する。	議会第200回のあゆみ
1965	昭和	40	4		山崎大橋が完成する。	議会第200回のあゆみ
1965	昭和	40	4		山崎中学校校舎体育館が落成する。	議会第200回のあゆみ
1965	昭和	40	7		山崎町10周年記念式典が行われる。	議会第200回のあゆみ
1965	昭和	40	8	1	NHKのど自慢演芸大会が山崎中学校校舎体育館で行われる。	山崎新聞第1823号
1965	昭和	40	8	16	郡内初の学校プールが河東小学校に完成する。	山崎新聞第1824号
1965	昭和	40	9	26	山崎ライオンズクラブ認証伝達式が山崎西中学校校舎体育館で行われる。	山崎新聞第1829号

『山崎新聞』から見えるいじり

はじめに

山崎新聞が話題として取り上げられたのは、昨年六月の宍粟学講座で元共同通信記者である安富町出身の高田智之氏が「露風も寄稿した『山崎新聞』とその時代」の講演をされてからである。

歴史資料館保管分

山崎新聞の一部が以前から宍粟市立図書館に保管されていたが、昨年、宍粟市歴史資料館へ保管替えになった。新聞綴りの中には山崎新聞以外にも地域情報紙が断片的に残っていた。この機に新聞種別毎に発行日順に整理された。

- ① 山崎新聞 大正四、五、十年が一部ずつ、昭和四、十四年と昭和四十一、五十二年については抜けている号数もあるがかなり揃っている。昭和五十三、五十四年で三部 合計六九三部（ほかに重複の号数あり）である。
- ② 播磨民報山崎附録 大正三、四年 九部
- ③ 中国日日新聞宍粟附録 昭和六年 八部
- ④ 山崎民報 昭和六、七年 一六部
- ⑤ 山崎タイムス 昭和九、十年 一部
- ⑥ 播磨文化新聞 昭和二十六年 一部
- ⑦ 河東村弘報 昭和二十七、二十八年 五部
- ⑧ 播磨新聞 昭和三十一年 一部
- ⑨ 新播磨タイムス 昭和四十四年一、十二月 三一部

- ⑩ 宍粟新報 昭和四十七年 一部
 - ⑪ 宍粟タイムス 昭和五十七、五十八年 一二部
- 以上、新聞種別が一一種で、総部数が七九八部となる。

大正十五、昭和四年分の発見

山崎新聞創刊者の親族の家の蔵に多く残っていることがわかったと講演いただいた高田智之氏から情報をいただいた。その一部を、歴史資料館（以下「資料館」）で借用することができ、デジタルデータとして保管されている。

その山崎新聞は、大正十五年一月十一日付第五〇一号、昭和二年七月六日付第六〇〇号の一冊綴りと、昭和二年七月十一日付第六〇一号、昭和四年四月六日付第七〇〇号の一冊綴りの計二冊で一九八部である。

昭和二十五、二十七年分の発見

次に、長らく当郷土研究会の支部役員をされていた福原町の石野和雄氏が先般お亡くなりになり、親族の方から蔵にある古書類を整理したいと申し出を受け、資料館では今年六月に古書類の寄贈を受けた。その中には昭和二十五年から二十七年の山崎新聞が四五部含まれていた

以上が現存を確認してできている山崎新聞であり、創刊者の親族が保管されている他の年代のものが出てくることを望むばかりである。また、会員からの情報もいただければありがたい。高田智之氏の講演資料や前述のものから以下のことを考察する。

創刊と廃刊の時期

昨年の講演会で高田智之氏は大正四年八月三十一日の創刊号に創刊者の山下駿治さんが述べている「創刊の辞」を引用している。資料館に創刊号はないが、最も古いのが、大正四年（一九一五）十一月六日付第八号である。月に三回発行であったことから、同年八月下旬の創刊は符合する。もう一つの根拠は昭和四十四年（一九六九）二月二十五日付第一九四六号から昭和五十四年四月十日付第二二五七号までの各号に創刊大正四年八月三十日が刷り込んでいることである。一日のずれはあるものの創刊日が裏付けられる。

つぎに廃刊日については昭和十四年（一九三九）五月二十五日付第一一六七号で「廃刊と更正のご挨拶」として地方新聞が統制により廃刊となることを述べているので明らかである。なお、戦後再発刊された日は不明であるが、前述の資料館への寄贈新聞の中に昭和二十五年八月二十一日付第一二六〇号があることから、発行号数を引継いでいると思われる。そして、資料館保管の中で最も新しいのが昭和五十四年四月十日付第二二五七号である。いよいよ廃刊の最終号は不明である。後の発見に委ねることになる。ただ、戦後発刊されたものは時代の変容を受け、編集者も代わっていて、戦前のもとは編集内容が変わっている。

三木露風の寄稿

たつの市出身の「赤とんぼ」で有名な三木露風がこの山崎新聞に延べ一五七回に及んで紀行文や短歌俳句を寄稿し続けている。初出は昭和二年（一九二七）六月六日付第五九四号で、「東京の春と夏

と（一）」で露風三八歳の時の寄稿である。最終は資料館保管で見ると昭和五年十二月二十一日付第七八八号となっている。寄稿を始めたきっかけを露風は創刊者の弟になる山下郁三さんとは龍野中学時代の同級生であり、親しい関係にあるとしている。主な紀行文として「四国の旅と自然と」を三一回連載し、つぎに「北日本の旅と自然と」を五九回連載している。紀行文と短歌俳句が数首（句）といるのが多く、終わりに近づく短歌俳句のみの寄稿となっている。露風の寄稿は一ページ目のいわゆる巻頭に紀行文を載せている。露風の知名度が高かったこともあるだろうし、編集者の露風への思いがあったものと考えられる。

あとがきにかえて

この新聞の特徴は、文芸関係記事が多いことである。全国的に文芸熱は高かったが、山崎もその例外ではなく、城下町の時代から短歌俳句が盛んで、現在にも通じることだが、大正・昭和初期にも読者の多くが文芸を好んでいたことが想像できる。

山崎新聞はこの地で息長く情報を発信し続けてきた。今後、未発見の年代が早く見つかり、全容を掴みたいものである。

なお、この拙稿を記すにあたっては、ジャーナリストの高田智之氏に頼るところが大きかった。残る課題についてもお世話になることをお願いして、現状の報告とする。

大谷 司郎

空中写真と地図(その2)

清水 哲

私は山崎町の横須に住んでいるので、退職後は町中まで自動車以外に徒歩や自転車で行くことが多かった。様々なルートで往き帰りした。その途中で、あの辺りは少し低いとか高いとか、この辺りに段差があるとか、この崖はあすこまで続くとかを見てきた。毎日なんとなく見ている景色だが、どうしてこうなったのかをぼんやりと



写真① 1947年(昭和22)の秋に米軍が撮影したもの
国土地理院ホームページから引用。

考えるようになった。地質学・地形学の素養がない者だが、この一九四七(昭和二二)年の空中写真を見ながら想像することを許していただきたい。

5、河岸段丘と過去の流路(旧河道)

(1) 山崎の台地(河岸段丘)の形

この写真は、今より建物が少なく圃場整備以前のものである。そこから二つの事に気がついた。ひとつは山崎市街地の台地(河岸段丘)の形、もうひとつは昔の川の流路跡である。

まずは市街地の台地。大歳神社から旭町にかけての段差は、以前は所々確認できたが今は建物で覆われてわかりにくい。しかし、人家の少ない終戦直後のこの写真では横須・上寺から段丘の崖が曲線を描きつつ東進し、今のヤマト運輸付近で大きく曲がって南下していることが読み取れる。崖や急斜面は草木が茂るので周囲の田畑より色が濃く写り、わかりやすい。河岸段丘とは河川の流れにけずられて出来る階段状の地形である。

山崎町市街地の台地部分は、最上山の山塊が徐々に崩れたり(栗市のハザードマップを参照すれば谷筋からの土砂砂礫の流出がわかる)、上流から土砂が運ばれ堆積して出来た平地が、揖保川・伊沢川・菅野川に削られて出来たのではないかと想像する。何万年・何十万年という単位での話である。岩石は気温の変化や雨風にさらされることで風化し、割れて細かくなっていく。河川には浸食・運搬・堆積の作用がある。

私たちはこの長い歴史の一瞬に生きている。

(2) 伊沢川の流れの跡

① 横須古墳は低い河岸段丘の縁か

遠い昔に伊沢川は上寺付近まで山麓をえぐり（その流路跡は少し低い）、東に向きを変えそして南下した。横須、上寺と続く河岸段丘はこうして出来た。横須にはもう一つ低い段丘があり、横須古墳は写真②のようにその縁にある。この古墳を造った人々は、その場所がそこそこ安全と考えたのであろう。

段丘が階段状に複数あることは地盤隆起や気候変動によるもので、よくあることらしい。天正十四年に龍野城主になった木下勝俊が山崎に新町を申し付けたが、その町（山田と山崎）は道とともに上位



写真②
右は北から見た横須古墳。東側の市営住宅との約1メートル余りの段差に注目。この段差は南に延び下の写真へ



写真③
南（上寺側）から見た写真。住宅に囲まれてわかりにくいですが、市営住宅のやや左の電柱付近に古墳がある。段差はここまで続く。中ほどの丈の高い枯草で見えにくいのもう一つ上の段丘がある。手前の道は人の手か。

段丘にできたのではないか。また、町屋と武家屋敷とを分けるために後につくられた外堀は、上位段丘と下位段丘（武家屋敷側）の段差を利用して造られたのではないかと私は想像する。

② 山麓を削る

伊沢川は最初の流路で、山から流出堆積した土地を削って横須・上寺河岸段丘をつくり、流れのゆるい庄能付近に土砂を堆積して自然堤防をつくりつつ、更に山崎台地を縁取り、揖保川と合流して南進して台地の東や南の縁（段丘崖）も形成したのではないか。

空中写真に写る山崎河岸段丘のへりの田畑の畦の形が、かつての流路を示している。大昔に耕作を始めた古代の先祖が田畑をつくり、その畦が地形の歴史を記録してくれたといえる。家もまばらな頃の空中写真はそれを示している。

③ やがて伊沢川の流路はかわったか？

伊沢川はまた次の時期に、生谷橋付近からマックスバリュ山崎店辺りに向けて流れたこともあったのではないか。空中写真において、生谷橋付近の庄福店付近からマックスにかけての用水路と道に沿って、細長い耕地が等高線のように並んで連なるのは、そこが傾斜地でありまたくぼんだ低い土地に田畑をつくったということを示す。それは昔の川の流路の跡ではないかと思う。次の写真④は生谷橋南詰から農協方面を見たもの。右手に庄能集落の北側の段差があり、マックスバリュに向かう用水路と道路は少し低いことがわかる。この段差は尾下歯科駐車場から北側生谷橋方面をのぞむ下の写真でどうか見える。生谷橋の下を東進する現在の伊沢川は、三番目の流路ではないかと思う。

6、過去の流路（旧河道）と自然堤防
三津における揖保川の流れの跡



写真⑦

右は、一九四七年の空中写真の、山崎町三津の部分を取り出したものである。中ほどに田畑の畦が山側にくねっているのがわかる。揖保川はある時期に本流が分流かわからないが、このように流れたのではないか。イエローハットの店の西からカワベの駐車場にかけて低いのはその流路跡のためだろう。今の下三津にかけて削られた崖が草木に覆われて濃い色に写っている。この上に段丘がある。流れがゆるくなった東側に、川の運んだ土砂が堆積して自然堤防と呼

ばれる微高地をつくり、そこに出来た集落が中三津ではないかと思う。

山崎東中学校付近から東側に降りると、アグロとゴダイの間に出る。そこで前を見ると国道29号線の向こうに車の屋根越しに中三津の水田が高く見える。国道29号線が出来る前から集落の方がわずかに高かったのだと思う。

三津の用水は五十波の井堰から引かれ、上三津で田畑に降り、さつき大橋付近からは所々で西側（山側）の田畑に分水している。即ち山側が低く、かつての流路跡は低い水田となった。用水は最終的に中三津南端で揖保川にかえる。

宍粟市のホームページには地図情報のページがある。その中の『基盤地図』には標高が10センチ単位で記入されているので、詳細にみれば高低や段差を数値で確認することができる。それでの付近の標高をみると、民家のこちらの田は99・1メートル、付近の29号線は98・6メートルである。両者の間にはもう一段低い97・6メートルの狭い田がある。この百メートルほどの区間は通る度に気になった。



写真⑧
山崎東中から下ってアグロとゴダイの間に出る。手前は29号線



写真⑨
1975年 国土地理院撮影から三津を拡大。
建物は少し増えている。流路跡が田の畦に
よりはっきり見える。さつき大橋は2年後
の1977年に完成した。

上左写真⑩
さつき大橋の北150メートル地点から西側の
29号線方面を写す。二〇一九年二月十八日。



写真⑦と⑨に見える流路跡の、現
地に行ってみると高さ約一メートル
の北側の段差が29号線沿いの三津公
民館まで続いている。ここがかつて
の流路の縁であったことを示す。公
民館から東を見ても同じ段差は確認
できた。写真では遠くにクレーンが

見える。実は冬に造成工事が始まった。三津公民館の横に火の見櫓
があるが、そこから東を見ても今は大きな商業施設ができており、
流路跡の段差は見通すことができない。景観はほんの数ヶ月で変わ
るものであり、一旦道路、石垣、擁壁などの建設のため整地されて
しまうと当初の地形はわかりにくくなる。

おわりに

私は山崎郵便局二階の駐車場に車をとめる度に、青蓮寺の崖下標
高約91メートルの揖保川からの用水路と、与太呂付近の裏手から局
の方に年中流れ出る溝の水をみる。山田町・本町・西町と続く台地
の標高は100〜102メートル、防災センター前を通る主要道路宍粟下徳
久線の標高は97〜99メートル。この間に外堀を掘ったとしても揖保
川の水をあげることは難しい。

天保十三年の町屋絵図（図書館二階に展示）には弁天之池・上ノ
丁池・寺町之池（御用水）の水がどこに流れるかを丁寧に書いてい
る。これから考えると外堀の水は、池の水・雨水・わき水などであ
ろう。三枚の城絵図及び町屋絵図と現在の地形を考えると、外堀の
余り水は高低差からみて清水口南辺りから用水路に流れ出たと推測
する。

地質学・地形学の基礎を学んでいない私には、図書館に取り寄せ
てもらった多くの書物は難しく、一般向けに書かれた部分しか理解
できなかった。そのためここで取り上げたごく身近な河岸段丘や自
然堤防（と私が想像するもの）については初歩的な知識をもとに景
観から推測するしかなかった。それでも自分が住んでいる地域の成
り立ちや変化を考えるのは、平凡な日々には何か「張りあい」を与え
てくれた。

地形の確認には、ボーリングによる地層や火山灰の研究、放射年
代測定、古地磁気測定などがあるそうだが、それは素人には出来るも
のではない。市町村史や公にされている地質図・地形分類図・ハザ
ードマップなどを参考に、地形の景観からその成り立ちを想像する

以外ない。その点で昔の写真は貴重である。

揖保川の上流域にも河岸段丘はある。アマゴ釣りに行った時、家原公園の段丘上の駐車場から北に向かい、右手に御形神社から奥へと続く段丘、左手に旧三方小学校の段丘、奥に西公文の段丘をよく眺めた。そのたびにすごい景色だと思った。

三つの川が合流する中流域の山崎町は、扇状地、河岸段丘、自然堤防などが多く見られる地域だと思う。

参考資料

①『平野と海岸を読む』 貝塚爽平 岩波書店 一九九二年

一般教養書として書かれている。氷期・間氷期の繰り返しという気候変動と地盤隆起が段丘形成に影響しているようで、その模式図は他の本にも引用されている。宍粟市立図書館にあり。

②『技術者のための地形学入門』熊木洋太他 山海堂一九九五年

測量専門学校生のための地形学の教科書をめざしたそうだ。図も多くわかりやすい。同図書館にあり。

③『近畿の活断層』 二〇〇〇年 防災センター一階にあり。

最初の用語解説の部分は図も丁寧でわかりやすいが、本論は専門的で難解。地図に近辺の河岸段丘を記している。段丘の判読や認定は人により微妙に違うようだ。そのためか、山崎付近の地質図や地形分類図においても、段丘の場所、段丘か扇状地か等について必ずしも一致してはいない。

④『自然堤防の諸類型』籠瀬良明 古今書院 一九九〇年

日本で自然堤防が論ぜられたのは一九三〇年から新しいのとこと。戦後になり教科書の教材になったそうだ。

⑤『山崎町史』10頁の図7「山崎町地質図」

山崎台地のみならず上寺・横須も下牧谷・段・金谷・五十波・菅野も段丘ありとなっている。しかし凡例では「段丘層および崖錐」となっており悩ましい。なぜか与位の段丘の指摘がない。

⑥五万分の一都道府県土地分類基本調査・地形分類図「山崎」

(昭和61年調査 国土交通省 インターネットで見ることができる)

この地形分類図では、山崎台地・加生・下牧谷・五十波・与位・伊和・東市場等は段丘とされるが、横須は表示がない。山崎台地以南は「龍野」の地形分類図の範囲となっている。山崎町以南には段丘は少ないようだ。

⑦国土地理院「ベクトルタイル地形分類」(インターネット)

旧流路(旧河道)・氾濫原・自然堤防・山麓堆積に詳しい。上寺や加生は山麓堆積地形。横須は段丘の表示が無く私の思い過ごしか。この図は災害危険度を知らせる目的があるようだ。

⑧宍粟市ホームページ、地図情報「基盤地図」

この地図を拡大すると市内各所の標高がわかる。等高線地図にまさる。身近な高低や段差が数値で確認できる。

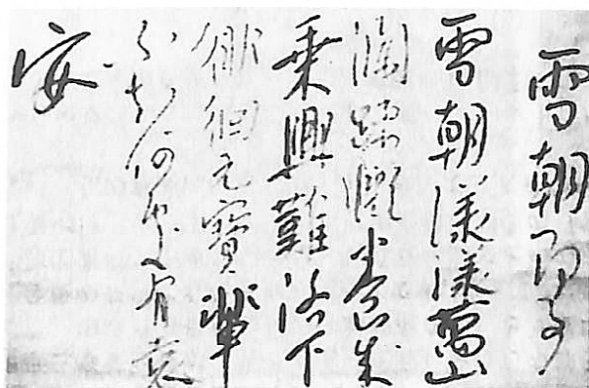
最後に二つ。広い地域の地形図をつくる際、航空写真を使うらしい。2枚の航空写真を特殊なレンズで見て高低差や段差を把握するそうだ。誤差も誤認もあると思う。

「旧流路」「流路跡」「旧河道」はほぼ同じ意味のようだ。

山崎闇齋の「雪朝即事」せつちゆうそくじ

松下宣夫

これは、山崎闇齋研究会の展示資料の一つです。闇齋先生が雪の朝、京の周辺の山々を見て、眼前の光景を漢詩（七言絶句）にされたもので、私塾に通ってくる弟子達に、叱咤激励し奮起を促した掛け軸だろうと思われまます。



闇齋先生自筆（京都市下御霊神社の出雲路家所蔵）

雪朝即事

雪朝漾漾萬山瀾○
踈懶養朱乘輿難○
洛下徘徊元寶輩○
不知何處有袁安○

○印は韻字

《詩の通解》

雪の朝、京を取り囲む比叡山や大文字山など横に波がしらを連ね揺れ動いている様である。朱子学を学ぶことを怠けていると、偉くなり輿に乗ることは出来ないよ。洛下（みやこ）を徘徊している宝の原石のような輝く可能性を持つ若者たち。彼等は何処に袁安があるのかを知らない。

成功の地、或は政治的、文化的な人間としての理想の境地を求めて彷徨している若者たちへの檄であり、悠遠な山脈の見える地で学

ぶ有為な若者たちへの応援歌とも考えられます。直筆の太字で強調されている文字の字義、濃淡の流れにも闇齋先生らしい迫力を感じます。

この頃の学びの風景を、澤井啓一氏は『山崎闇齋』で次のように述べています。

闇齋先生の講義は一本の棒を持ちながら、それで机を叩きながら講義をしたので聴く者すべてが顔を上げることもできずにいた（『強齋先生雑話筆記』）という話や、大声を張り上げて講義をしたので、外で道行く人が立ち止まって聴いていたという話や、巳刻（午前十時）から授業を始める習慣があったが、チョットでも遅れた者は門を閉じて入れなかったという話等々。また、講義では細々したことば省いて要点のみを話したので、一回の講義で『論語』ならば四丁（袋閉じにした紙の表と裏で一丁）今の本の八頁分に相当します、『孟子』に至っては六丁以上進むこともあった。（以上、『尚齋先生雑談録』）こうした授業のあり方は、「崎門の講釈」と呼ばれたが、師説をきちんと伝承する意味から講義形式を重視したのだと思われる。現在版本や写本として各地に残っている崎門系の書籍には、「講釈」に於いてどのような話がされたのが具体的に分かるような「書き入れ」のある書物も多く、師から門人へと次々に伝承されていたことを知ることができます。テキストを読むときにどこに注意すべきか、何を最も重要なポイントとするべきかなど、テキストの解説に必要な「心得」といったものが一門の中で「伝授」されていました。この話は闇齋先生が門人に対してことのほか厳しかったという逸話として伝えられています。

福原謙七の地方官時代

森岡昌純と品川弥二郎と

高井 淳

明治の初め、郷里山崎に帰ってきた横尾（福原）謙七は、山崎本多藩の士籍を与えられました（明治十三年までは横尾姓です）。

明治五（一八七二）年の学制発布で学区取締に任命され第十六大区宍粟郡の小学校作りに奔走し、教育水準を高めるために尽力しました。兵庫県教育会議日誌によると、明治九年十二月一日、県内の学区取締三十七名と師範学校派出訓導十五名が集められ新しい教育の仕組みについて話し合われました。その中で謙七の存在は際立っていたようです。その時の会議録の五つの議題の中の三つで、謙七の発言が取り上げられています。真剣に考え発信する力と熱意を持っていたと言えます（『兵庫県教育史』四十八頁・五十八頁）。

明治十二年一月郡区町村編成法が制定、施行され、郡長制が始まりました。明治十二年一月三十日揖東郡長には沢野清八が任命されました。沢野は元林田藩士で敬業館の藩儒河野鉄兜（崎門学派系図参考）に学びました。林田県参事を経て、初代揖東郡長となります。就任当時はコレラが大流行し郡役所でもおおわらわでした。沢野郡長は明治十二年七月十九日森岡県令に電信を打ち指令を仰ぎましたが、七月二十四日の日付で「電報ヲ以指令シ得ベキニアラズ」との返事でした。沢野は明治十二年九月十六日に病氣療養を理由に郡長を退官しました（『「太子町史」付録ふるさと史話』一九六頁・一九九頁）。

後任の郡長には横尾謙七が任命されました。明治十二年八月の県

職員録には謙七は学務課九等属とありますが、明治十三年三月の職員録には揖東郡長となっています。明治五年より飾磨県の参事に任じられ明治十二年兵庫県令になっていた元薩摩藩士の森岡昌純は、謙七に接し、彼の能力を高く評価していたものと思われます。但し『兵庫県郡役所事績録中巻』の揖保郡（明治二十九年四月一日揖東郡、揖西郡は揖保郡に統合）歴代郡長には沢野の急な退任の混乱の為か記録に不備があり謙七が載っていません。郡長時代、謙七の事績については『姫路市史十二巻』百四頁から四百四頁までに八通、森岡県令、村総代、戸長とのやり取りの文書がありますが、ほぼ事務的な内容です。謙七は明治十五年四月十九日からは現高砂市を含む地域である印南郡長への転任を命じられます。明治十七年四月四日に退任するまでの事績についての記録は見つかっていません。

森岡は明治十八年四月七日兵庫県令から、農商務少輔に転じ、退官しています。品川弥二郎が農商務大輔を兼務しつつドイツ全権公使になった年です。そして三月としか日付がない森岡の品川農商務大輔に宛てた書簡には「・・昌純・・お国に係り度候・・」とあり、品川の引立てを願っています。それまで謙七は森岡の意に添うべく学区取締、揖東郡長、印南郡長と職務に懸命に勤めましたが、森岡の中央政界での活躍はなく日本郵船会社社長として財界で名をなすこととなります。

謙七は明治十七年四月四日印南郡長を退任します。森岡との関係はいろいろと考えられますが、謙七の今後の政治活動の発展に欠かれない品川との繋がりが出来ていたという可能性も想像することができます。今後の資料の発見に努めたいと思っています。

ぶらりふるわと地名考シリーズ②「山崎」

竹内 克司

地名から探る山崎（町）の歴史

山崎という地名は、山端の突き出したところという地形によるものです。全国には多くの同名の地名が存在しています。江戸時代に編さんされた地誌『宍粟郡誌』（片岡醇徳著・宝永五年（一七〇八））によれば「是は一郡の都会なり郡府と云うなるべし」とあり、四方



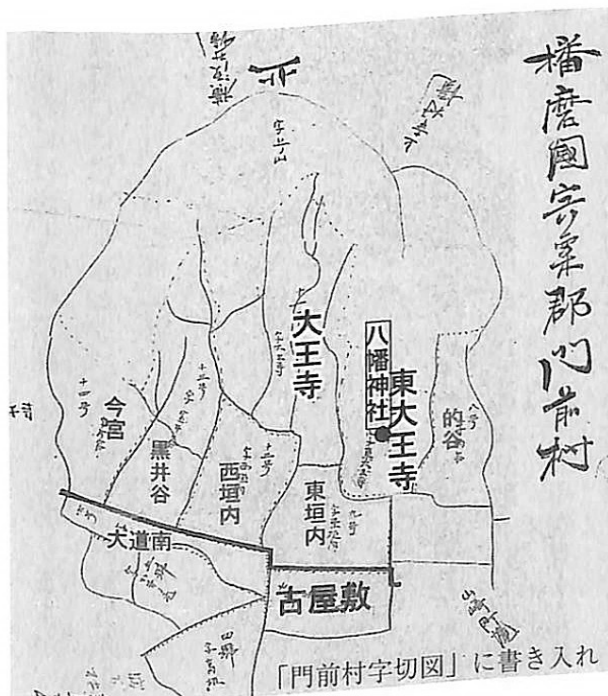
の谷の要で交易の便がよい場所として、山崎は江戸時代を通じ宍粟郡の最も栄えた町となりました。それを感じることができる写真（上記）が残されています。それは明治後期最上山から南に向かって撮ったものです。そこには城下町の町屋の屋根が東西に連なり、写真中央の山崎小学校の向こうには城下平野の田園が広がっています。

この山崎町が形成されていった中世・近世の時代を残された地名から探っていきたいと思います。

篠ノ丸周辺に残された中世の地名

山崎町の門前と横須にいくつか目を引く地名があります。それは篠ノ丸（通称一本松）周辺地で、門前の「古屋敷」、横須の「屋敷」、「上屋敷」そして篠ノ丸頂上の「笹（篠）ノ丸」です。篠ノ丸頂上とその麓に残されたこれらの地名こそが、篠ノ丸城を拠点に宍粟郡を治めた宇野氏ゆかりの地名です。

これら屋敷を含んだ地名は、篠ノ丸城の大手・搦手を守るための屋敷と考えられます。山崎八幡神社（門前）の場所が「東大王寺」、神社の境内の西の谷筋が「大王寺」という小字が残っています。大王寺という寺は、史料による裏付けはないものの宇野氏の菩提寺ではなかつたかと推測されます。嘉吉元年（一四四一）



に起きた嘉吉の乱（赤松満祐による室町幕府第六代将軍足利義教の殺害）の後に宇野氏が退いた場所に八幡神社が移転し建立されたと考えられます。

す。八幡神社社記によると、応仁元年（一四六七）に遷座したとあり、そのとき境内のモッコク（推定樹齢六百年）がすでに存在し、以来神木とされました。

宍粟藩主池田輝澄による山崎城と城下町造営に関わる地名

天正八年（一五八〇）宇野氏が羽柴秀吉に滅ぼされた後、龍野城主木下勝俊が宍粟郡を治め、「新町申付」により町への転入を促す施策を打ち出し、当時篠ノ丸南麓には「山崎村」と「山田村」の二つの農村があり、この二つの村を結ぶ一筋の新町が生まれました。

関ヶ原の戦いの後播磨は池田輝政が治め、当地に代官を置きました。その後輝政の四男輝澄が元和元年（一六一五）に宍粟藩主となり居城を新町の南の河岸段丘上に定めました。この場所は天文年間、出雲の尼子氏が播磨に侵入し、一時支配したとき砦を築いた地と言われています。山崎城は、大手を北に、北東西の三方に武家屋敷を配し、その北方に町屋敷をつくり、商工業者の居住地としました。武家屋敷と町屋敷の間には外堀を設け、土塁、石垣により厳重な境界を敷いています

武家屋敷の地名の由来

武家屋敷には、清（志）水口、江戸町、東桜町、本多町、三軒町、西桜町、六軒町、通り町、中ノ町、松原町がありました。城内は郭内と呼ばれ、明治八年より鹿沢と改称されました。

- ・清水口は武家屋敷東端で、清水の出る場所があった。
- ・江戸町は江戸詰の藩士の屋敷があった。

- ・東桜町は武家屋敷を東西に抜ける道の東方をいう。
- ・本多町は藩主本多の屋敷に面する通りにあることによる。
- ・三軒町は大手道の西の通りで三軒の大屋敷があったことによる。
- ・西桜町は武家屋敷を東西に抜ける道の西方をいう。
- ・六軒町は南北の道を挟んで六軒の屋敷があったことによる。
- ・通り町は武家屋敷内の土橋門と鶴木門を結ぶ道で、庶民の通行が許され、城下方面の人々の通行が多く、城下町の入り口にあたる西新町・本町が最も賑わった所と言われている。
- ・中ノ町は「通り町」と「松原町」との間にある町からなる。
- ・松原町は武家屋敷の西端にある。



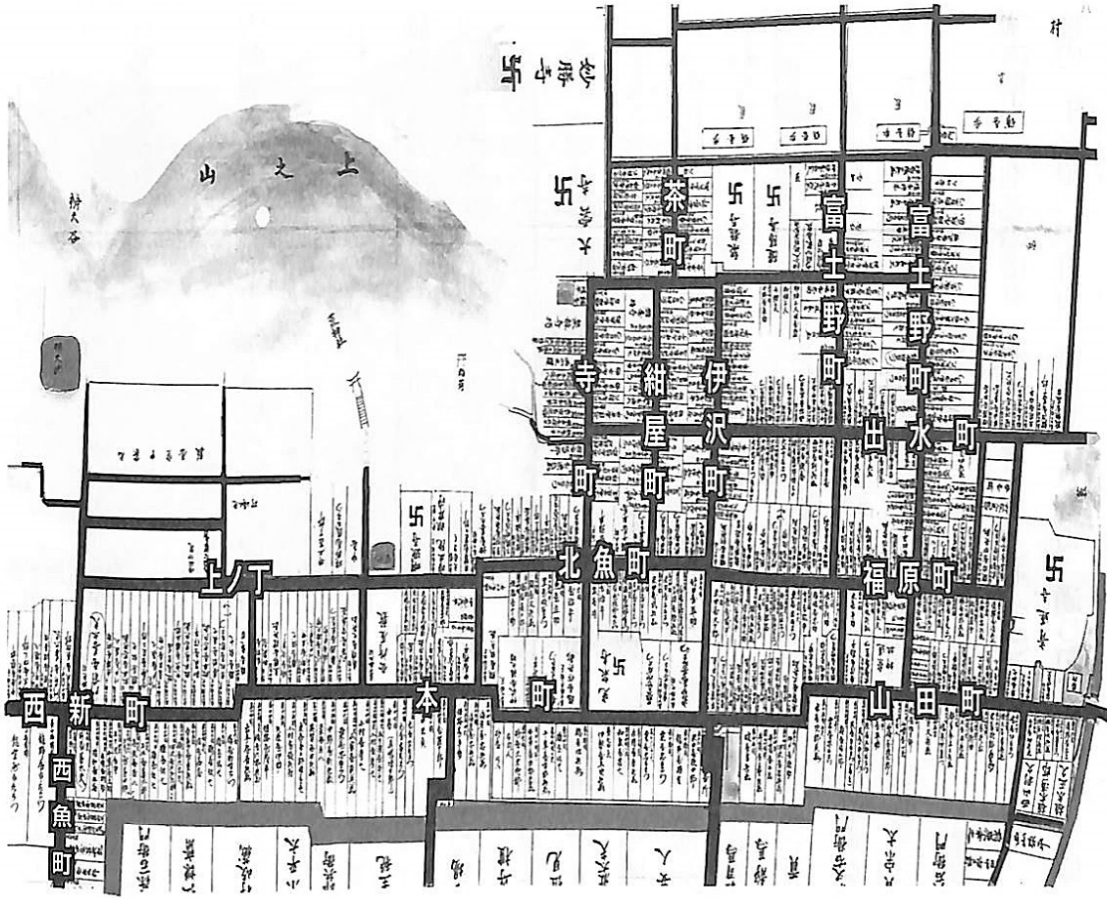
町屋の地名由来

城下の町屋は、時代とともに発展・整備され、西新町、本町、山田町、福原町、北魚町、寺町、紺屋町、伊沢町、富士野町が生まれ、元禄十七年（一七〇四）の大火の後、出水町が加わり、十町になりました。現在の字表示山崎町山崎番地がこの十町に

城下の町屋は、時代とともに発展・整備され、西新町、本町、山田町、福原町、北魚町、寺町、紺屋町、伊沢町、富士野町が生まれ、元禄十七年（一七〇四）の大火の後、出水町が加わり、十町になりました。現在の字表示山崎町山崎番地がこの十町に

あたります。

・西新町は宍粟藩主池田輝澄の時代、佐用郡が増された時にできた町。佐用郡から多く人が移り住んだため一時佐用町と呼ばれた。



・本町は町の中心地で始め中ノ町と呼ばれていたが、本町と改称。

・山田町は山田村から発展した町で、本町の東隣りの町。

・福原町は、当初高野町と呼ばれていたが、藩主池田輝澄の家臣福原小左衛門がこの場所に居住後に、いつしか町の名となる。

・北魚町は名の通りの職人町。なお西魚町が西新町内の土橋御門前にあることが延宝八年（一六八〇）頃の山崎構図に記載があり、魚町が北・西として区別して存在していた。

・寺町は名の通り。大雲寺が建立された当初は大雲寺町と呼ばれた。紺屋町は染物業の職人町。

・伊沢町はこの町の先が伊沢谷に通ずることによる。籠野町ともい、一角に茶町と呼ばれたところがあった。

・出水町は元禄十七年（一七〇四）の大火の後、区画整理された町で、防火用水などの対策がなされたものか。

・富士野町は一宮の富士野鉾山に通ずる道筋にあたることによるか。

その他の関連地名

・上ノ丁は西新町の裏通りにあり、歩行町であった。現在の元山崎。
・田町は城下町形成の際に、町内居住の農民を、現在の「山田」の地へ移転させ農人町ができた。地名は田んぼの中のできた町から。

参考：『山崎町史』、『宍粟郡誌』、『角川日本地名大辞典』、『兵庫県小字名集 西播磨編』

比地条里の研究

中比地の条里地割を中心にして その3

片山 昭悟

中比地の条里地割について

宍粟市山崎町中比地の条里地割をとどめている小字は、石田（いしだ）、市ノ坪（いちのつば）、河井（かわい）である。

石田（いしだ）のNO1については通称いしだである。北は、金谷の荒木筋（あらかすじ）と接し、西は上比地の北河原（きたがわら）に接する。菅野川の氾濫による河原石の礫を含んでいることから石田と付けられたものと思われる。

米作りは砂礫土であるため保水もやや少なく収穫量も金谷周辺と比較してやや少なかったようで、ここは南北方向の長地式が存在する。中央より東には、半折式が存在する。

NO2は、南北方向の長地式が存在する。地形の復元を試みると、谷間のような旧河道のラインが設定できる。このことからおそらく上比地の北河原から中比地の石田、河井にかけてかつて菅野川が流れていたとの言い伝えからも推定される。

市ノ坪は条里地割に関連する名である。

NO2、NO3、NO4は長地式地割がもつとも残存している。

市ノ坪は、金谷字安田筋の南に位置して西は大溝を挟んで石田に続く、NO1は、安田筋4の続きで東は、中央で切られているが、北は東西の半折式で、南は南北方向の半折式である。NO2は南北

方向の長地式地割で六区画にされている。

NO3は南北方向の長地式地割で六区画にされている。このNO3は西よりの端部は東西方向の小さな半折式を用いている。

NO4は南北方向の長地式の地割で八区画にされている。

市ノ坪は、ほ場整備に伴う遺跡確認調査で平安時代の柱穴群が検出されているようだ。

河井は、NO1は、南北方向の長地式と半折式を用いている。半折式を用いている。NO2は半折式である。

谷間のような旧河道のラインがみられることからみて、河井は、かつて菅野川が流れていたものと推定される。おそらく上比地の北河原から中比地の石田はかつて菅野川が流れていたものと推定される。

上比地の条里地割について

上比地の北河原（きたがわら）にも中比地の石田から条里地割が広がるようである。NO1とNO2は半折式である。

NO3は東西方向の長地式の地割が認められるが変形したようである。これは、金谷字蛭町筋からの続きで、北河原にかけて菅野川が流れていたように考えられる。

御名の条里地割について

御名の条里地割について説明する。

御名には条里に関連するものと思われる小字がついているのは、鍋ヶ甫（なべがほ）や井田（いだ）で、鍋ヶ甫は、現在城下小学校の

校舎が建っているため条里地割の復元は不可能である。

鍋ヶ甫の東限は、浄土真宗本願寺派の寺院である西光寺の西の小溝が小字境になる。条里地割の一町方格の区画を延長すると、この小溝となるのでここまでの範囲であると考えられる。

なお、鍋ヶ甫については鍋が付く小字であることから、金谷には江戸時代に金屋村鋳物師の長谷川氏がかつて存在していたことから関連するものと考えられることから比地条里の時期が解明できるヒントになるものと思われる。

井田については、条里地割が存在しているが、菅野川の氾濫による堆積層で、地割は制約を受けている。

千本屋の川西から御名の鍋ヶ甫、井田にかけての東溝は、ほぼ南北に走る小溝が存在する。小溝は古くから通称「ニゲンドウ」とよばれる重要な溝であったとされる。

まとめ

宍粟市山崎町の条里地割は、中井、比地、川戸、宇原、中などに認められる。

比地条里は、城下地区南部の菅野川左岸の千本屋、御名、金谷、上比地、中比地に広がっている。山崎町の中でも大規模な条里地割である。比地条里の地割は、菅野川を越えて千本屋にも広がりを見せている。特に中比地の市ノ坪には顕著な長地式地割がもつとも残存している。

また、金谷の安田筋と荒木筋には半折式地割が残存している。

中井には条里に関連するものと思われる小字がついている。志水

ヶ坪、泉ヶ坪、小牛ヶ坪などであるが、これらは古くとも中世に遡る小字と考えられる。

中井の条里地割は、地形的にみて比地条里とは、ややずれがみられる。

城下平野の条里地割は、奈良時代に見える比治里に関連する条里地割の調査や記録は見つかってない。

平安時代は「比地郷」で、室町時代には比地御祈の荘園として代官小河源左衛門の名が見られる。

城下地区南部は、菅野川の氾濫により条里地割は制約を受けているところがみられる。

地形復元を試みると、揖保川や菅野川の河川の氾濫が認められ、城下地区の小字からも千本屋の川西や上比地の北河原、中比地の河井など河原や川の小字が付けられている。

また、ほぼ中央には、菅野川が北西方向から南東方向に流れる。

このことから条里地割は、城下地区の南部と中井から下広瀬周辺に範囲が限定される。

今回、城下地区の地図と航空写真より比地条里地割について概要を説明する機会に恵まれた。

なお、比地条里は、昭和五十一年（一九七六）から昭和五十五年（一九八〇）にかけての団体営ほ場整備事業により条里の原形を留めていませんが、今も字名や通称は残っています。

弁田



ほ場整備前の比地条里地割と字名・通称名

会員・家族の文芸

◎冠 句

振り向いて ふる里思う山河有り
 翼欲し 友を訪ねて西の国
 振り向いて 停まる車にありがとう
 翼欲し 優雅に浮かぶ鳶一羽
 振り向いて 先人嘆く農離れ
 翼欲し 四季の風受け空散歩
 振り向いて 我が人生に感謝する
 翼欲し 老いの足腰すたれゆく
 振り向いて 母に繋がる人の逝く
 翼欲し 渋滞の列はるか先
 振り向いて 昭和平成思い出す
 翼欲し 豊かな自然四季眺め
 振り向いて 若さの香り浴衣帯
 翼欲し 空と心に花が咲く
 振り向いて 回り道でも今がある
 翼欲し 天を駆けぬげ逢いに行く
 振り向いて 白雪に残る靴の跡
 翼欲し 風切り行けば涼しいか
 振り向いて 風のささやき耳澄ませ
 翼欲し 星空の旅夢の中
 振り向いて 今日の天気をそっと見る
 翼欲し 今年もツバメ来てくれる

坂本 忠彦
 坂本 忠彦
 大谷 志路
 大谷 志路
 宇田 志夫
 宇田 幸夫
 宇田 幸夫
 実友 勉
 実友 勉
 嶋津 千里
 嶋津 千里
 為国真佐行
 為国真佐行
 谷笹 まや
 谷笹 まや
 高井 怜依
 高井 怜依
 西家 侑希
 西家 侑希
 西家 侑希
 三木ひづる
 三木ひづる
 中瀬 公三
 中瀬 公三
 中瀬 公三

◎俳 句

髪のを短くカット聖五月
 大西日千の石仏千の黙
 鉄の道人跡絶えて青嵐
 リユウグウの石見まほしや梅雨明ける
 熱戦の続くグラント雲の峰
 水入らず至福の時や宿浴衣
 虫おくり松明ともし棚田行く
 心根のやさしき人や風涼し
 木漏れ陽に藤千年の優雅みせ
 兄妹が多くいた日の麦の秋
 大空を鳶の一鳴き夏野かな
 羽繕ふ小雨降るなか夏燕
 野も山も蠢きはじめ春霞
 そよ風に乗る賛美歌や聖五月
 ネモフィラの大海原や風光る
 仕舞風呂桜に雪の日の終り
 天と地の繋がる梅雨の吐息かな
 取り伏せし草立ち直る半夏雨
 人間を忘れるほどの炎天下
 幻の汽笛や夏草の廃路

里見 和樽
 里見 和樽
 京屋 伊助
 京屋 伊助
 杉山美保子
 杉山美保子
 高井 麗子
 高井 麗子
 田中 良子
 田中 良子
 鳥羽チエノ
 鳥羽チエノ
 三浦 ゆき
 三浦 ゆき
 高井 智代
 高井 智代
 速水美知代
 速水美知代
 宗平 圭司
 宗平 圭司

※つぎの一句、前号で間違っていましたので、お詫びを申し上げます、
 正しい句を掲載します。
 点々と稲架に鴉の五線の譜

京屋 伊助

令和元年度の研修旅行のお知らせ

研修部

事務局だより

平成三十一年度の通常総会が開催されました。

日 時 九月二十九日(日) 午前七時五十分集合・午前八時出発

午後六時頃帰着(予定)

集合場所 岡野歯科下駐車場

行 先 鳥取城跡・東照宮・宇部神社・国庁跡・岡益の石堂

池田家墓所

*ボランティアガイドの説明があります。

参加費 一人 金五、〇〇〇円

昼食・入場料を含みます

申込方法 九月二日(月)より二十日(金)まで

神姫観光山崎案内所(神姫バス山崎待合所隣接)

時間は、午前十時から午後三時まで。土・日曜祝日は休

みです。募集人員は四十名です。

会員の家族の参加も歓迎します。

今回も山崎文化協会と合同で実施します。

詳細は、八月発行の会報第一三三三号に挿入のパンフレッ

トをご覧ください。

なお、定員になり次第締め切ります。

記

日 時 平成三十一年四月二十一日(日) 午後二時より

場 所 宍粟防災センター四階研修室

議 事 一、平成三十年事業報告について

二、平成三十年度会計報告について

平成三十年度監査報告

三、役員改選

四、平成三十一年度事業計画について

五、平成三十一年度会計予算について

以上の各議案は承認されました。

総会終了後、記念講座として、「記録映画 和鋼風土記」を鑑賞
しました。

山崎郷土会報総目次

「山崎郷土会報」 第二二四号 平成二十七年三月七日発行

一三〇〇年前に成立した『播磨国風土記』

『源氏物語』の写本と平瀬露香

段の観音堂絵馬伝説

最上山・一本松・道沿いの樹

戦国時代 宇野氏と赤松氏の関係

法蓮寺縁起

エッセー椿は不吉な花か

二十六年度研修旅行記

同写真集

「山崎郷土会報」総目次一〇一号〜一一〇号

事務局だより

編集後記

大谷 司郎
浅田 耕三
河本 雅規
清水 哲
竹内 克司
深川 定義
里見 亘
宗平 圭司
会報部
会報部

「山崎郷土会報」 第二二五号 平成二十七年八月三十日発行

「安心の御時節到来への願い」

天保十二年山崎藩国元『覚帳』から

戦国期 塩田城・塩田明證寺の伝承と

宇野村頼の書状から見えてきたもの

揖保川十二波かわまちづくり事業の経過報告

山遊び

地名の「読み方」の特異性について

やまさきまち歩きガイドの会

会員・家族の文芸

鎌田 裕明
竹内 克司
伊藤 一郎
鳥羽 正泰
深川 定義
坂本 忠彦

大歳神社の藤
土橋門跡について

「地区の話題」雨乞いの行事について

「山崎郷土会報」総目次第一一〇号〜第一二三号

平成二十七年研修旅行のご案内

事務局だより

編集後記

会報部
史跡部
会報部
会報部
研修部

「山崎郷土会報」 第二二六号 平成二十八年二月二十七日発行

桓武伊和神社について

エッセー 夢かぞえと想う

秀吉軍の陣地か 柏原城跡

京都御所と琳派京を彩る展の見学

ホテルの里やまさき (前編)

やまさきの風景 大フゴ山

山を歩く

宍粟山崎の江戸時代の貴重な文化遺産

揖保川の浜御殿周辺のことについて

金谷の古墳の立地状況の考察

宍粟市の梵鐘 (江戸時代) 年代別集成 (I)

会員・家族の文芸

事務局だより・編集後記

平成二十七年・平成二十八年年度の役員名簿

大谷 司郎
浅田 耕三
竹内 克司
浅田 茂樹
河本 雅規
里見 亘
鳥羽 正泰

「山崎郷土会報」 第二二七号 平成二十八年八月二十八日発行

望月の欠けたる悲しみ 王朝女性の出産事情

浅田 耕三

ホタルの里やまさき (中編) 河本 雅規
伊能忠敬測量隊 (支隊) の受け入れと経費について

菅野川の外来植物

鎌田 裕明
里見 亘

三森城跡 山麓に居館跡

竹内 克司

地区の話題

ふるさと神野を考える活動について

山本 高則

段の観音堂の絵馬伝説の現地調査

片山 昭悟

「旧因幡街道」の石柱・山田の道標の調査

会報 部

宍粟市の梵鐘 (江戸時代) 年代順集成 (Ⅱ)

片山 昭悟

会員・家族の文芸

平成二十八年度研修旅行のご案内・事務局だより

編集後記

「山崎郷土会報」 第二二八号 平成二十九年二月二十五日発行

明治以降の年表 (一)

大谷 司郎

「道筋御案内御本陣用達」と

奉行の力が問われたとき

鎌田 裕明

四公六民の民

浅田 耕三

句集の紹介 句集『溪流』宗平圭司さん発行

続「ホタルの里」やまさき (後編)

河本 雅規

田路氏の城跡をめぐる

～郡境に足跡を残した武将～

竹内 克司

〇〇町はどこだ

清水 哲

NHK大河ドラマ「真田丸」の現地を訪れて

研修 部

「宍粟市の梵鐘

(明治・大正・昭和・平成) 年代順集成 (Ⅲ)

片山 昭悟

会員・家族の文芸

事務局だより 総会のお知らせ

編集後記

「山崎郷土会報」 第二二九号 平成二十九年八月二十六日発行

明治以降の山崎の年表 (二)

大谷 司郎

「崎門学派の系譜」と「福原謙七翁碑」の

パネルについて

鎌田 裕明

伊藤太郎平の事跡

伊藤 一郎

安積氏とその城跡

竹内 克司

山崎の城絵図について

清水 哲

宍粟の銅鐸出土地の考察

片山 昭悟

地区の話題

ふるさと戸原の地域づくり活動

釜井 宣雄

城下小学校の時鐘・塩田の明證寺の梵鐘

金谷山部古墳・金谷一号墳

会員・家族の文芸

深川定義氏を悼む・研修旅行のお知らせ

事務局だより・編集後記

平成二十九年・三十年役員名簿

「山崎郷土会報」 第二三〇号 平成三十年二月二十五日発行

明治以降の山崎の年表 (三)

大谷 司郎

福原謙七先生について 八四年の生涯を貫くもの

山崎閨斎研究会共同研究グループ

因果はめぐる

浅田 耕三

浅田耕三先生ともしびの賞受賞

山崎歴史郷土館（一）

青年団と盆踊り

波賀城と城主中村氏について

『〇〇町はどこだ』と『国絵図』に追加

播磨国風土記比治里一考察

研修旅行 備中松山城と吹屋

会員・家族の文芸

事務局日より・編集後記

河本 雅視

伊藤 一郎

竹内 克司

清水 哲

片山 昭悟

研修部

「山崎郷土会報」 第一三二号

平成三十年八月二十六日発行

明治以降の山崎の年表（四）

福原謙七の思想について

福原謙七の生涯及び関連年表

宍粟藩初代藩主池田輝澄の足跡をたどる

空中写真と地図（その一）

戦争をしてはいけない 石野和雄氏の記憶

豊前僧播磨公弁円の墓

鬼と生霊

山崎歴史郷土館（二）

比地条里の研究

金谷の条里地割を中心にして

会員・家族の文芸

研修旅行のお知らせ・事務局日より

編集後記・会員の著作紹介

大谷 司郎

鎌田 裕明

高井 淳

竹内 克司

清水 哲

伊藤 一郎

田中 健一

浅田 耕三

河本 雅視

片山 昭悟

編集後記

『山崎郷土会報 第一三三号』をお届けします。

第一三三号は、令和になつてはじめての会報です。

大谷司郎会長は明治以降の山崎の年表（六）と山崎新聞から見えることについてです。山崎の年表は、地道な史料調査で、前号の戦中から戦後の昭和二十年代の出来事は多くの方から反響がありました。今回は昭和二十七年から四十年のできごとです。

次に清水哲さんは空中写真と地図（その2）です。長年山崎の地形について現地調査と写真と地図による調査研究の積み重ねで大変興味のあるテーマです。松下宣夫さんは、山崎閻斎の「雪朝即事」について、高井淳さんは福原謙七の地方官時代についてです。竹内克司さんは、ぶらりふるさと地名考のシリーズ②で、今回は山崎がテーマです。私は比地条里の研究中比地の条里地割を中心にして、このほか会員・家族の文芸、研修旅行のお知らせと総会と新年度の役員紹介、そして、これまでの会報の総目次の一二四号から一三一号までです。皆様のご協力のおかげで充実した号になりました。

会員のみなさまに読んでいただいて興味のあるもので、わかりやすいもの、地域の話題として必要なものであることを心掛けています。なお、頂いた原稿は、原文尊重を第一として編集しています。

（片山昭悟）

平成三十一年度・令和元年度役員名簿

役職名	氏名	住所	電話
会長	大谷 司郎		
副会長	伊藤 一郎		
事務局 長	田中 健三		
会報部 長	片山 昭悟		
研修部 長	坂本 忠彦		
史跡部 長	伊藤 一郎		
山崎地区西1支部 長	竹内 克司		
山崎地区西2支部 長	高井 淳		
山崎地区東支部 長	伊藤 一郎		
山崎地区北支部 長	伊野 操治		
城下地区支部 長	片山 昭悟		
戸原地区支部 長	田中 健三		
河東地区支部 長	宇野 正憲		
神野地区支部 長	上田 泰三		
蔦沢地区支部 長	矢野 賢一		
菅野地区支部 長	浅田 茂樹		
土万地区支部 長	森田 且元		
監事	浅田 茂樹		
監事	里見 亘		

平成三十一年・令和元年度										各部構成
顧問	史跡部長	研修部員	研修部員	研修部長	会報部員	会報部員	会報部員	会報部員	会報部長	
春名 俊夫	伊藤 一郎	三木 一男	宗平 圭司	坂本 忠彦	生田 安弘	竹内 克司	鎌田 裕明	河本 雅視	片山 昭悟	

PHOTO-STUDIO
Meyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90 〒671-2577
TEL (0790) 62-0700(代) FAX (0790) 62-0700

E-mail: gaisyo@yasuisyoten.co.jp
URL: http://www.yasuisyoten.co.jp/

老松酒造有限公司

■老松ダイニング
発酵と麹の健康ランチ
定休日: 木曜日(予約優先)

■老松販売所
日本酒・リキュール・麹商品

老松酒蔵見学出来ます

〒671-2577
宍粟市山崎町山崎12
電話0790-62-2345



まごころを伝えます。

一献献上 品質本位 地酒

一播 献州

山陽 盃

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyohai.com HP http://www.sanyohai.com

いとう画廊

兵庫県宍粟市山崎町山崎413
TEL (0790) 62-0371
FAX (0790) 62-0371



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

外科・内科 山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 020036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 生薬風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL: www.isawanosato.com E-mail: info@isawanosato.com